

## 阿南市立阿波公方・民俗資料館に 第九代公方、足利義根の 詩碑を訪ねて

阿南漢詩研究会代表 田中 公

那賀川町古津に資料館を訪ね

た。そこに第九代、すなわち最後の公方、義根の詩碑がある。初代が室町時代末期に居を構えてから270年間、この僻陬の地に京を移したような一画が厳然として存在した。その最後の華やきを後世に伝える碑である。詩は五言律詩。義根公の詩集「棲龍閣詩集」全5巻、219首中の代表作とされている。格調高雅、平明にして要を得る。揮毫は羽ノ浦町古毛出身の文学博士・竹治貞夫先生である。その詩をここに引きます。

上巳前一日諸子集棲龍閣 探韻  
(上巳の前一日、諸子棲龍閣に集まる。韻を探る)

紅桃花發日

諸友弄風烟

寒謝祈農後

會催修禊前

小園聊養拙

一閣此延賢

詞筆平生好

含杯卜夜筵

紅桃 花發く日、

諸友 風烟を弄す。

寒は謝す 祈農の後

會は催す 修禊の前。

小園 聊か拙を養い、

一閣 此に賢を延く。

詞筆 平生の好、

杯を含んで 夜筵を

卜す。

碑は詩の区切れを無視しており、読みづらい。下に博士の訓読が添えられている。ここではその訓読に読み仮名と句読点を付した。どんなことを言っている詩か。

桃の節句の近づくある日、館に詩友を招いて詩酒の宴を催した。それを義根がホストの立場から詠じている。棲龍閣における当時の生活の一端がうかがえる。漢字をほぐすと次のような意味が浮かび上がる。題。上巳、三月三日の桃の節句が近づくある日、詩の友だちが集まって、探韻(※)を楽しんだ。

前の二行。紅い桃の花が発き始めた。参会の人たちは春霞に浮かれ

気分になっている。

次の二行。寒さが和らぎ、村人は豊作を祈るおはらいなど、耕作準備に忙しく、私も京の習慣に習ってみそぎをしたり、会の準備をしたりで忙しかった。

次の二行。私はこの棲龍閣で拙いながら詩の勉強をしているが、今日は立派な詩人の皆さんをお招きできてうれしいことだ。

最後の二行。平生は詩の勉強のおつきあいであるが、今宵はお酒など酌み交わして楽しい会になったらいいなと思っている。

義根には島津華山という師匠がついていた。義根の才を認めた父親が京から招いた先生である。華山25歳、義根16歳であったという。碑中の詩は義根30歳代の作であると竹治博士は推察されている。華山、義根を中心に、棲龍閣は江戸後期の阿南の地の漢詩文化の一大拠点になっていた。詩集の刊行は義

根公、京へ退去の約20年前であり、所載の219首は、「(館における)平穩幸福であった前半生をそのまま反映するものである。」と竹治先生

は「訳注棲龍閣詩集」の「緒言」の中で書いておられる。私の訳は先生の訳注を参考にしてはいるが、ほとんど私の勝手な解釈である。

(※) 詩会で出席者全員が即席で詩を作る  
ときの、少しスリルを味わう遊び方

あなん文化紀行は偶数月号に掲載します。



棲龍閣詩集



義根の漢詩碑(竹治氏監修)



復元公方館模型